

横井小楠の甥たち

かつて W.E.グリフィス (1843~1928) が暮らした家が当館のモデルになっていますが、その家と同年に建てられた熊本の洋館が、平成十八年の地震で崩壊しました。一世紀半前、そこに住んでいたのは、やはり米国からやってきた「お雇い」、リロイ・ランシング・ジェーンズ (1837~1909)。開設されたばかりの洋学校で教えた退役軍人で、熊本の地にキリスト教の種を蒔いた人です。

この洋学校建設に尽力したのが、米国から帰国したばかりの横井大平 (1849~1871)。長崎以来の同志である日下部太郎 (1845~1870) に先んじて、兄の左平太 (1845~1875) とともに渡米し、日下部と同じ下宿で暮らしました。現地で W.E.グリフィスと知り合い、彼に学業を支えられています。

日下部は現地で結核に侵され客死しましたが、大平も同じ病を得て帰国し、ジェーンズが着任する直前に二十三歳 (※数え年) で亡くなりました。同年に福井藩校の教師としてグリフィスも来日した事を知り、数名の少年たちを福井に送り出して、彼の元で学ばせています。

この横井兄弟との縁から、グリフィスは彼らの叔父平四郎 (号は小楠 1809~1869) という人物の存在を来日前から知っていたと思われます。彼の著作 *The Mikado* (1915) には以下の言及があります。

○儒教の倫理と哲学を講じ、越前の精神的指導者であった横井小楠については、その主君に及ぼした影響力において、ちょうどジョージ・ワシントンの下にいたアレグザンダー・ハミルトンに匹敵すると言えば十分であろう。1869年、京都で暗殺者の兇刃に倒れる前、彼はシナ語訳の福音書によって、「永遠のサムライ」を発見していた。歴史上のイエスがそれである。しかも幸いなことに、彼は教会の教義や伝統にとらわれなくてイエスを見ることができた。

○1869年、京都新政府の会議において、横井は信教の自由だけでなく、エタつまり賤民の地位を公民にまで引き上げることを主張し、実現を確実にした。その精神において、これはリンカーンの偉業にも比すべき仕事である。そしてリンカーンのごとく、彼の苦勞は暗殺をもってむくわれたのだ。何という気高い生涯であろうか。

○キリスト教徒横井平四郎は、たぶんこの国ではじめて、これらの人々の地位を引き上げ、市民権を認めるべきことを弁じた政治家であった。彼は「夷賊に同心」したというので、京都でローニンに暗殺された。

岩波文庫『ミカド』 亀井俊介訳

グリフィスが横井兄弟と出会うほんの数年前まで、米国は内戦の渦中にありました。いわゆる南北戦争です。ジェーンズは陸軍士官学校卒の将校として、北軍で戦っています。宗教などの違いに寛容な都市フィラデルフィア出身のグリフィスも、まだラトガース大学に入る前、黒人奴隷の解放をとなえる北軍の志願兵として、その若い命を懸けた人でした。そんな背景が、横井小楠という政治家に対する、グリフィスの最大級の賛辞にはあります。

もちろん小楠はキリスト教徒ではありません。しかし当時の日本においてもキリスト教の解禁に積極的な人物とみられていた事は、彼を殺したテロリストの供述からも伺えます。一方、グリフィスは神学校に通って牧師になった人です。また、横井左平太・大平兄弟や、小楠の薫陶を受けた由利公正たち福井藩士を、直接によく知っています。そんなグリフィスが「キリスト教徒」と断言するほど、横井小楠の思想は普遍的であり、強い理想主義と実践精神をあわせ持ち、無知をもって「邪教」を攻撃するような偏見からは程遠い世界認識に達していました。

#### 横井小楠の見識

横井小楠にとって、正義は普遍です。幕末、外交政策をめぐって大混乱に陥った京都で、幕府・朝廷の高官、大名と外国公使が一堂に会する大会議を開いて日本の進路を切り開こうとした福井藩の運動の中心に彼がいたのは、正義の前では日本も外国も関係ないという信念があればこそです。

横井小楠の思想において、わが国を外国から守らねばならないのは、日本が国際社会の中で特別神聖な存在だからというような、偏狭なナショナリズムからではありません。力で他国を侵す事は正義に反するという、普遍的認識からです。

グリフィスが著書で言及したジョージ・ワシントンに、小楠はとても尊敬していました。国家元首の地位に連綿とせず退任して適任者を選任する体制を築いた事は、儒学者小楠にとって理想の体制「堯舜の世」でした。また、大義を掲げて英国に屈することなく、されど独立後は再び戦争とならぬ様に尽力したワシントンの国際平和主義こそ、小楠の求めてやまぬ正義の安全保障でした。

左平太と大平は、叔父の盟友勝海舟の世話で彼が指導する海軍学校に学んだ後、長崎の宣教師 G.フルベッキに教を請い、ついには米国で海軍実務を学ぶ決意を固め、幕府の禁を侵して密航します。この海外留学の先駆者としての行動力の源泉は、彼らが叔父から継承した理想の輝きでした。渡米する彼らへの、小楠の送別の詩はよく知られます。

堯舜孔子の道をあきらかにし 西洋器械の術をつくす

なんぞ富国にとどまらん なんぞ強兵にとどまらん 大義を四海にしかんのみ

横井小楠に感化された福井藩からは、日下部太郎が後に続きました。生涯小楠の弟子を自任した松平春嶽が、維新後の東京でフルベッキに外国人教師の斡旋を依頼した結果、W.E.グリフィスが福井に赴任します。かつて小楠とともに福井藩の命運を維新の最前線になげうとうと奮闘して失脚した、由利公正や小笠原幹たちが今は藩の幹部としてグリフィスを暖かく迎え、親しく交わる事になります。グリフィス来日の前年、すでに小楠は京都で暗殺されていましたが、グリフィスはその人物・思想にふれる機会にめぐまれた事自体に、小楠の影響力が現れています。

グリフィスの主著 *The Mikado's Empire* (皇国 1876) には、こんな記述があります。

○ (福井滞在中) おとぎの国か夢の中にいると思う事がよくあった。けれども、この人たちは我々 (米国人) と同じだった、その心まで。・ ・ 風土・民族を異にしている、各々の規範や制度という鎧の下に隠された共通の人間性をみるならば、唯一の父なる神の子として平和に暮らす望みは、すでに幻想ではない。

また、グリフィスは福井から家族にあてた手紙の中で書いています。

○日本は世界で最も幸福な人たちに満ちています。我々を熱に浮かれさせて不幸にしてしまう欲望を知る事なく、簡素に平和に生きています。・ ・ 我々の文明を醜く歪めた悪徳の多くが、ここには全くありません。キリスト教文明の祝福に伴って奢侈と浪費がもたらされ、彼らがこれまで無縁だった悪と悲しみを知ることになると思うと、厳粛なためらいを覚えます。

彼もまた「異教徒」に対する偏見にとらわれない、普遍的精神に恵まれた知性の持ち主でした。真のキリスト教徒を自任するグリフィスにとって、横井小楠はその精神の在り方、正義の実践者という人生の行動様式において、改宗云々という客観的事実とは別の次元で、真の「キリスト教徒」と認識すべき存在だったといえます。お酒に滅法だらしなかった、現実の人間小楠と宴席を共にする機会があったら、さてどうだったでしょうか？

その後

横井左平太は帰国後まもなく三十一歳で病死。政府で活躍する時間はありませんでした。小楠の実子時雄 (1857~1927) は、従兄の大平が残した熊本洋学校で L.L.ジェーンズに学び、その影響でキリスト教に入信しました。その後京都で、やはり北米密航者だった新島襄 (1843~1890) が創設した同志社に学んで牧師となり、のち社長をつとめています。

横井小楠の旧宅四時軒も先の地震により、ジェーンズ邸のような全壊は免れたものの、大きな被害を受けました。七十年前に福井市も、かたちある遺産を一度に失う同じ経験をしました。ただ、先人の思想や記憶といった、かたちなき遺産を守るのもまた、難しいことです。幾世代を超えて語り継がれるべき歴史が、明治にも、そして現代にも、きっとあるのでしょうか。

### 横井小楠関連年譜（左数字は年齢）

- 1 文化六年八月（1809/9/22）熊本に生まれる。通称平四郎。諱は時存（ときあり）。
- 37 弘化二年九月（1845/10/19）甥の左平太（時治）、生まれる。日下部太郎と同年。
- 41 嘉永二年四月（1849/4/30）甥の大平（時賓）、生まれる。
- 46 安政元年七月（1854/8/10）兄の時明を亡くす。家督を継いで以後、甥を育てる。
- 47 安政二年五月（1855/）四時軒に転居。この頃『海国図志』により国際的理解。
- 49 安政四年十月（1857/12/3）時雄、生まれる。
- 50 安政五年四月（1858/5/19）福井藩に招聘され、福井着。
- 54 文久二年（1862/）政治総裁となった松平春嶽のブレーンとして、幕政を動かす。
- 55 文久三年八月（1863/10/7）京都出兵をめぐる福井藩の政争。熊本へ帰国。
- 56 元治元年四月（1864/）左平太・大平、神戸の勝海舟塾に入るべく、熊本を発つ。
- 58 慶應二年四月（1866/6/11）左平太・大平、米国留学のため、長崎から密航。  
十月（1866/11）左平太・大平、ニューヨーク着。翌年、日下部も渡米。
- 60 明治元年四月（1868/5/15）新政府参与に就任。  
左平太・大平はラトガース・グラマースクールに在籍。
- 61 明治二年一月（1869/2/15）京都で暗殺される。  
明治二年五月（1869/6/21）大平、帰国のためニューヨークを発つ。  
グリフィスはラトガース大学を卒業。  
明治二年十一月（1869/12/8）左平太、米国海軍兵学校入学。  
翌年に日下部は亡くなり、グリフィスは日本へ。
- 明治四年四月（1871/5/20）大平、死去。23歳。グリフィスの福井滞在中。
- 明治四年八月（1871/）L.L.ジェーンズ、熊本着。
- 明治四年十月（1871/11/21）左平太、帰国のためニューヨークを発つ。  
まもなくグリフィスは東京へ。
- 明治八年十月（1875/10/3）左平太、東京で死去。31歳。グリフィスは前年に帰国。
- 明治九年九月（1876/）熊本洋学校、廃校。翌月、ジェーンズ熊本を去る。

※年齢はすべて数え年です。